

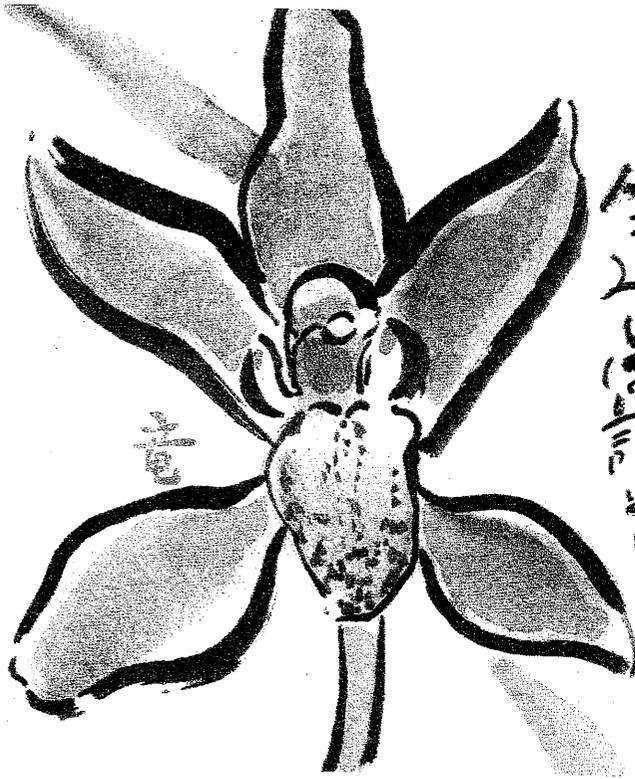
# オリーブの樹

第133号

2016年2月14日

## شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



戦争と  
空爆の年  
ふりがえる  
イスラム国と  
生み出す

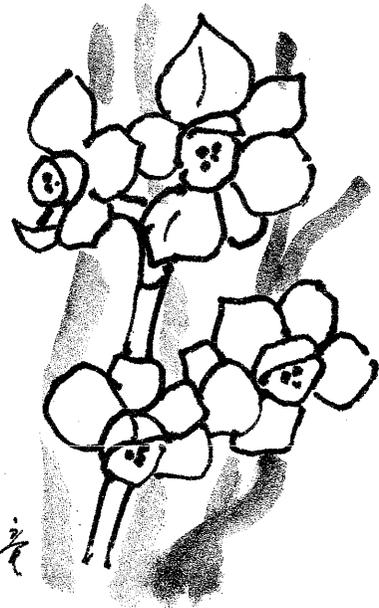
### 目次

- P 2 冬の歌 重信房子
- P 3 独居より 重信房子
- P 13 読んだ本 重信房子
- P 16 中東2016年——「サイクス・ピコ密約」から百年（上） 重信房子

重信房子さんを支える会

冬の歌

雪割りてムスカリの咲く草原はイスラーム国の領土となりぬ  
 菜の花の一面に咲く畑の中歩めば香る青い春の日  
 暁暗に幽けき陽の花忽ちに溶けて埋めく新年の光  
 冬薔薇冬至の短い陽を浴びて獄に一輪燃えつつ炎  
 冬の房ガイベラ五本届き来てわが指先で季節がふるえる  
 若狭から大阪までのリレーデモ点から線へ線から面へと  
 悲しいのか憤りなのか夕間暮れわが窓の辺でカラスが騒ぐ  
 新たなる出発の日反省と開き直り過ぎる逮捕記念日  
 立冬にひねくれものか赤とんぼゆつくりゆつくり青空を舞う



独居よい 11月10~1月31日

米欧諸国は中東混迷の原因(パレスチナ問題)の解決ではなく、その混迷の結果生み出されたIS叩きに躍起になっています。

重信 房子

11月1日 何と気持ちの良い快晴の週末。窓の外の木々は紅葉。黄葉しています。

新聞では、ロシアのシリア軍事介入を契機に、一方で「シリア問題」を政治的に解決するためのウィーンでの17か国会議に、イランも初めて招かれて会議参加したとのこと。その一方で米は、反体制派を助けるために、最大50人の特殊部隊を派遣し、対IS作戦で、更にシリアに軍事介入すること。アメリカ独自に育てた最初の部隊が7月末配置したところで、拉致・殺害で壊滅。ヌスラ戦線にやられてしまったので、「新シリア軍を5,000人云々」の米の計画頓挫。ロシアの介入で戦略変更を迫られたようで、「穏健派反体制派」支援に切り替えて、初のシリアへの特殊部隊派遣です。当面はトルコと矛盾のあるまま、クルド勢力など、共同していくでしょう。

ロシア・イランと、米・トルコ・サウジは、アサド退陣をめぐる対立したままながら、ロシアイニシアティブで、政治的的局面を切り開こうとしているようです。とにかく、部分的でも停戦地域が広がり、住民たちの被害が止まることを祈るばかりです。すでにシリア内戦死者25万人以上、国内避難民760万人、国外難民410万人と、国連の推計です。パレスチナもまた、アルアクサ・モスクでの祈りを妨げられ、入植者の暴力に抗し、厳しい闘いが続いています。

まだ2014年ガザ空爆の復興ができずにいるというのに。冬の厳しい寒さ、これからの闘いに気をもむばかりです。

11月3日 快晴。この日は思いっきり晴れますね、毎年。紅葉した樹々から光を浴びた葉が、踊るように降っています。この日から益々寒さの増す八王子です。

四方田先生、台湾からのお便り。「第二次大戦の映画表象」という学会で、李香蘭について講演するためとのこと。「今年85才になるシリアの亡命詩人アドニスに台北のそこで会いました。パリ在住です

が、今でも107才のお母さんに電話すると、『戦争が終わったら早く帰っておいで』と言われるとか。アラビア語で詩を書くこと自体がすでに EXILE 亡命者であることだと語っていました。石ですら叫ぶ、とかって書いた詩人です」と。

アドニスは健在でしたか。もう40年以上も前、ペイルートの芸術家仲間と彼の家で話したことがあります。美しい娘がいました。70年代初期、シリア・アサド政権をどう評価するかで論争があったころ。レバノン人パレスチナ人芸術家たちのアサド政権批判に、シリア人でアラウィの彼は寡黙でしたが。日本にも来たことがありましたね。先日、朝日でもノーベル文学賞候補の亡命詩人として特集していました。私が着いた頃のアラブは、解放運動に作家・芸術家がかかわり、71年にはダマスカスでは「絞首刑」(大島渚監督)、72年レバノンでは「エロスプラス虐殺」(吉田喜重監督)を上映し、吉田さんも訪ベイしていました。芸術家の溜まり場も何も、75年の内戦から蹴散らされていきました。アドニスの健在はうれしいです。

11月、15年前の秋を思い返しています。何もかも順調のように、どこかで慢心していた頃。そこに11・8。11月はいつも反省、振り返ること、慢心を戒めること、そしてまた、迷惑をかけた方々に謝罪し、支えて下さった方々に感謝する日となりました。逮捕から公判へと続く中、「支える会」を立ち上げて救援、友情の数々、今も変わらずありがとうございます。

11月4日 Yさん土曜会レポート感謝。今回は「安保関連法反対を継続しよう」という内容で、Mさんの話を中心に「山形おもいで館での福島子ども支援」「脱原発柏崎刈羽の現状」「辺野古現地闘争報告」や土屋源太郎さんの「砂川判決と安保法制」の本の紹介など語り合ったのですね。加えて「9・23さようなら原発さようなら戦争全国集会」の報告とデモ。とくに土曜会の幟を掲げた隊列の写真がいいですね。10月10日の「10・8山崎博昭プロジェクト」

の羽田弁天橋の献花と黙祷の報告もありがとう。山崎さんと高校の同級生だった辻恵元衆議院議員の司会で同窓生の山本義隆さんも発言。当時弁天橋に向かった現場の話はHさん。うれしいことに辻さんたちがこの「10・8プロジェクト」をベトナムホーチミン博物館に記録として遺そうとした話。ベトナム側は当時も今も日本の10・8闘争など知らなかったのですが、50年目にこうした企画をやることに感動され、逆にオファーを受けたとのこと。毎年ベトナムでは1月から3月「3ヵ月特別展企画」をやっているとのことで、それを共同し一年間準備して2017年1月～3月にベトナムで日本のベトナム反戦運動に関する展示を行うことになったとのことです。

2017年には土曜会も準備・ツアー参加ですね。「10・8プロジェクト」は当時の学生運動、反戦闘争そしてまた党派もそれぞれがとらえ返す機会となっていますね。とても大切なことですし、不十分でも私もそうしていきたいと思えます。報告を読みつつかつての闘いが現在へそして海外へとつながっていることを嬉しく思います。

11月5日 丁度届いた「人民新聞」にパレスチナ人の抗議しているエルサレムのアルアクサ・モスクの礼拝制限や禁止の理由がイスラエル在住のガリコ美恵子さんのレポートで記されています。

神殿の丘入場に関する「新法」が施行され9月からユダヤ人に開放され、それに伴いイスラーム教徒のモスクへの礼拝制限が逆に行われていたことが具体的に記されています。67年占領以降「現状を変えない」と占領軍政は明言して、ユダヤ人の入場は禁止されていたはずが、ネタニヤフ政権でユダヤ化を進めている為です。パレスチナ自治政府アッバスはじめトルコ、サウジ、イラン、ヨルダンからの抗議に対してイスラエル政府は無視。

10月17日には平和を求めるイスラエル人が集会デモで抗議し「差別をやめろ」「アラブとユダヤは敵として生きること拒否する」と訴え、ネタニヤフ政権に抗議しているとのこと。

10月31日もオスロ合意を実行したイスラエル・ラビン首相暗殺から20年。平和を求める集会が11月4日の暗殺現場のテルアビブで追悼集会として行われたとのこと。あまりの「大イスラエル主義」がやむにやまれぬパレスチナのインティファダーをつくりだしていることを知っているユダヤの

人々の声は小さくないようです。

11月7日 新聞を開け読みはじめたら「安保法案を肯定同志社大学長、学長選敗れる」の記事。バンザイ！良かった！とSさんたちの闘いの成果を喜んでます。村田晃嗣学長が松岡敬元副学長に敗れたのです。衆院特別委の中央公聴会で7月村田学長が戦争法案支持表明した後、教職員、OB、学生から「本学の精神に反する」「同志社のイメージを損なった」と批判集中でした。

また記事に「多田諤子反権力人権賞」で伊方原発反対運動の斉間淳子さん、辺野古移転反対など平和運動に取りくむ山城博治さんや慰安婦問題で活動する方清子さん3人に決まったことも出ています。戦争法案廃止し、実動させない様々な闘いが小さい記事から浮かんできます。

11月8日 逮捕記念日。朝から小雨。15年前のこの日はみごとな秋晴れでした。あの日を思い返すと様々な思いで胸が抉られるような痛みは今も変わりません。窓辺に立って旧友たち、友人たち、同志たちを思い、感謝と謝罪で胸が熱くなります。冷たい風が秋の匂いを運んでくる夕べです。みんなありがとう。

11月12日 今日はサプライズ。丁度届いた「オリーブの樹」132号を読みはじめた夕食近く「面会！」の声。前ぶれもなくメイの面会でした。いつもは帰国が分かたら姉の方から知らせてくれるのですが、丁度コンピューター故障でメイのメールを受けられなかったのでしょうか。一年ぶりの再会にお互い言いたいことは山程ありながら「いつ来たの?」「え?!知らなかった?!」と行き違いを話しているうちに面会時間はどんどん過ぎてしまっ……。

仕事もアラブでは大変みたいです。今回も講演にあわせて10日程とのこと。もっとゆっくりしてほしいのですが。でも生き生き元氣そうでエネルギーな様子を見て嬉しくなりました。短い熱い面会。終えて点呼のあと夕食。話したい事が一杯浮かんで困ります。

11月15日 13日(日本時間14日)夜、パリで同時攻撃で120人以上が殺された、とのこと。昨日夕刊と今朝の新聞「パリ同時テロ120人超死亡」「同時テロIS犯行声明」「仏非常事態宣言」の

大活字に国際社会の衝撃が伝わります。

殺された方々、負傷された方々やそのまわりの方々に深く同情すると同時に、このような攻撃に日々さらされているパレスチナの人々、空爆下のシリアの人々のこともまた、思いを致さざるを得ません。もっと日々大規模に、もっと長期にわたって。今回のISの攻撃は、彼らの劣勢と危機感によって、戦略の一部再編したと、みてとれます。

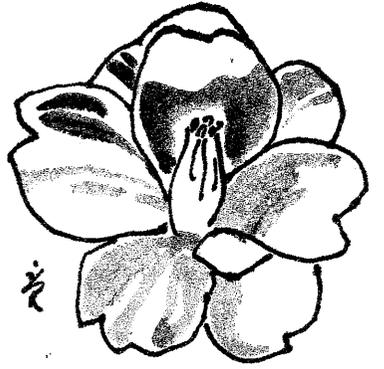
仏が攻撃対象とされたのは、仏の政府の政策が、もっとも攻撃的であり、かつての植民地に対する「反テロ」支援の軍事介入が、アフリカ含めてシリアまで続いていることがあげられます。そして「自由・平等・博愛」の看板の下で、差別が続く「同化政策の強制措置罰則」などが、イスラームの一部の反発を持たれてきました。パリで殺された無事の住民の何十倍の住民が、同じように仏の空爆で死を強いられていることを思い描く必要があります。

この「パリ事件」によって、ロシアまで含めた「大国」が「反テロ」の名で、軍事的に大同団結して、IS退治に向かうことを危惧せざるをえません。ISばかりか大国も余裕なく軍事拡大によって解決をめざし、その反対の混迷を再生産するのでは……と。

中東の民衆に軍事的破壊でなく、解決の希望のベクトルをさし示すこと、空爆ではなく復興武装解除、中東の「非核非戦地域化」の戦略こそ求め続けたい。ISの「残虐さ」「野蛮さ」「無差別攻撃」は意図した「戦術」であり、「脅威」を騒ぎ立て、軍事的に対決するほど、彼らの戦略にはまってしまいます。

「イスラーム国」の著者アブドルバーリ・アトワーンは、ISは当初、うさんくさい組織、米欧イスラエルなど情報機関の手がはいっているのでは?と見られ、警戒されたが、対IS空爆で欧米サウジらが攻撃し始めたことが、ISを英雄とし、信任させ、多くの若者たちがISへ参加するようになったことを記していました。中東の一般民衆が「サイクス・ピコ協定」時代以来、どれほど米欧・イスラエルに不信と恨みを持っているか、米欧はまったく理解しようともせず「軍事的解決」を繰り返し、軍需産業を太らせ、無事の住民を犠牲にし、問題を複雑にするばかりです。その一つの姿として、このパリの痛ましい現実、惨事をとらえないわけにはいきません。難民はさらに困難に……。

11月16日 「パリ惨事」から急速にシリア問題への「政治的解決」をめざすロシアイニシアチブに、



米も共同して進みそう。アメリカ主導のこれまでよりも、イランやエジプトなど加わって、国家間の收拾の方向は生まれそうですが、益々シリア国民が決定権を持てる体制から離れていくのでは……と気がかりです。軍事解決と連動して、大国の力の別のシリア再建の枠組みになっていくのでしょうか。ロシアもアサド個人を擁護しているわけではなく、パース党体制の下で、世俗主義を継承でき、ロシアの利害と一致するなら、アサド退陣も勿論反対ではありません。大国が決定する枠組みに、どれだけ住民の希望の解決がつかれるのか、まだ見えません。同様に、IS・ヌスラ戦線も。市民的な体制内変革を求める人々の、生存の闘争とは大きな開きがあるようです。

11月19日 「民主主義ってなんだ」は面白く読みました。とても身近でわかりやすく、若者の問題意識に寄りそっている高橋源一郎さんのかかわりはいいですね。日本での問題意識を育む一つのあり方を自らの若者の時代と較べつつ、とらえ返しました。同時に「生存の闘争」に精神も肉体も酷使し尽くすパレスチナの、アラブの若者の偉大さが浮かんでしまいました。

日本の政府・自民党は「パリ事件」を利用して、またもや「共謀罪」の創設を言い始めているようです。「反テロ」の名で、国際組織犯罪防止条約の批准に向けた「国内法整備」などと、また言い始めました。世界の「反テロ」の名で、強権的に統制集約されていく流れに安倍日本は「好機」と国家主義を企てています。沖縄しかり、戦争法しかり。国民の側の反対も、アジアとアラブ・アフリカ・アメリカ・ヨーロッパの人々と手をつなぐ闘いが必要です。更に!

11月21日 今日の新聞地方版に八王子医療刑の跡地は約5.3ヘクタール、防災公園や郷土資料館として整備されるとのこと出ています。「2017年度以降に移転が予定されている。施設老朽化の為昭島市にできる国際法務総合センター（仮称）に移る計画」だそうです。酷暑厳冬ですが自然が触れられて気に入っているのですが、東拘もそうでしたがコンクリートの密封状態になるのでしょうか。

12月4日 私にも「マイナンバー制度」の通知カードが届いたようです。これは「特別領置」扱いで本人には交付されません。「特別領置」というのは印鑑などの個人の貴重品を本人ではなく当局側が管理するものです。「個人番号カード交付申請のご案内」というパンフは届きましたが、出所時通知カードは交付されるでしょう。あちこちでこのシステム批判が出ているのは当然なのでしょう。利便性を強調していますが「便利」は管理のシステム。加えて個人情報情報はスノーデンの暴露していたことを考えれば、筒抜けです。

Mさん本ありがとうございます。「国際テロリズムハンドブック」。まだ「日本赤軍」が出ているのですね。「3、現在の『日本赤軍』2001年に解散したが公然面の後継組織「連帯」が依然としてリッダ闘争を評価しているとして「その武装闘争路線には何らの変化もないとの見方もある。」ですって！連帯も解散しているし、この本今年の7月20日発行の割には情報古すぎ！（著者・安部川元伸）

米国の「外国テロ組織の指定解除」になった組織に「日本赤軍」も2001年10月8日に入っていたようです。指定は1997年10月8日PFLP、ハマス、ヒズブッラーやパレスチナ解放民主戦線DFLP、クメールルージュ（ポルポト派）、トゥパク・アマル革命運動、ムジャヘディーン・ハルクなどとテロシキ指定第一回の一緒に指定されたとのことです。

実際に私たちが「名指し」でやられていたのは、第一次湾岸戦争直前の1990年の後半イラク攻撃準備のころの「テロを警戒」していた時のはずですが……。貴重な本ありがとうございます。

今日うけとった人民新聞の11月25日号に「パリ事件」に対する鶴岡哲さんのインタビューが出ていて、とてもよい学習になります。「市民的自由の制限と論議国家権力」のタイトルで仏政府のあり方を歴史的にもわかりやすく説明しています。

また丁度読み終えた「NO NUKES voice 06」はとてもよくこの間の「脱原発・反戦・反安保闘争」が分かります。ことにSEALDsのまわりの防衛隊などがあり、その戦い方に対する批判が辺見庸さんらにあることやSEALDsの奥田さんやハンストをやった人たちの声、旧世代の考えもはじめて知ること多かったです。

反自民反安倍政権で参院選の選挙区での統一のむずかしさばかりか、市民の運動もかつて日共がそうであったように「選別排除」の論理があるようですが、安保法反対一点での共同むずかしいのでしょうか。SEALDsら市民のうねりが野党を封鎖したり、別々にありつつも協同する知恵もいっぱい育っているようです。

12月8日 今日は初スチームが朝だけ45分間入りました。八王子は最高温度11℃最低1℃、もうすぐ零下になります。

届いた「紙の爆弾」に足立正生インタビューが載っていて健在な様子。9年ぶりの新作映画「断食芸人」（原作フランツ・カフカ）インタビューの鈴木さん「予想を裏切られて面白い！」とのこと。光州の劇場の柿落とし上映、日本では来年2月27日から渋谷ユーロスペースでやり、ベルリン映画祭にも出されると足立さん。きっと普遍性があるって評価されるのでは?!と期待しています。これまでスペインやメキシコでの足立作品上映で招待されても旅券がでない。両国の在日領事らが外務省にかけあっても「内政干渉するな」の一言。「日本の利益を損なう虞」とか。JRAに「超法規的措置」で釈放させた恨みでしょう。映画の科白にも「国家の意思なんだよ」と、使っているとのこと。「観念的でない」とのこと観てみたい！です。

12月9日 12月は岡本さん、浴田さん他友人たちのバースデーです。浴田さんはもう1年すこしで社会復帰！元気で期待いっぱいです。

12月10日 今日は久しぶりに11月中旬以来のグラウンド運動です。

午後、届いた「世界1月号」を読んでいたら、庄司弁護士の話が出ていました。「新連載ラストポロフ一謀略の残影第一回」です。元モスクワの日本大使館参事官だった庄司先生が、「ソ連のスパイ」として逮捕されるところが第1回。このジャーナリスト野

田峯雄さんが去年、庄司先生の残したメモなどの遺品を読み、この時の時代背景の中で起こった事件を解き明かそうとする試みのようです。心優しく本当に強靱な人、庄司先生を思い出しつつ読みました。

丁度今、「聴診器を手に絆を生きる—信原孝子医師のパレスチナ解放運動と地域医療」（信原孝子著・信原孝子遺稿・追悼文編集委員会編・インパクト出版会出版）が届きました。ドクター・サアードの業績や生き方が様々な方々によって記されています。こうしたかたちでドクターの果たしたことが歴史的に刻まれ、社会に示されたこと、とてもありがたく嬉しいことです。権力の弾圧もあって、友情も交わしきれずに永別してしまったこと、時として思い出してはパレスチナ・アラブのことを考えていました。こうした本ができたこと、日本のボランティアの嚆矢としてパレスチナの姿と共に描かれていて、ぜひ多くの人に読んでほしい本です。うれしいです。すぐ読みだして、彼女が書いている出会い、あの71年のペイルートが浮かびます。

12月11日 大雨。午後は青空。寒いけれどスチームは無し。ラジオでは三重の方では「夏日」を記録したとのこと。「異常」気象が「通常」気象になっているこのごろです。

12月15日 丁度届いた「アソシエーション」のニュースレターで、フィリピンのセブ島の草の根活動団体の機関紙に載ったという「日比国防協力強化二国協定—資本主義大國競争の中に占める位置」の翻訳を読んでいます。安倍政権がフィリピンと2015年1月30日「覚書」を調印し、その一環として日比海軍合同演習など、動き出していることを批判している論文。

米日アジア安保にフィリピンも位置付けられ、新植民地主義が対中国の名で進んでいること、安倍政権による戦争法制など、日本軍国主義と帝国主義大國への復帰を批判しています。海外の視座で、日本の進路をしっかりと見つけとらえると、より明確になる安倍政権の性格です。

12月17日 暖冬のせい、ほとんどスチームが入りません。8日9日他朝3回以外は入っていません。体感温度は寒いですが、去年の寒さではないです。晴天には陽が入るし、今日運動場に出ましたが、やはり少し体を動かすと汗をかきました。

昨日のYさんのお便りで、田宮さんの20周年に集られた方々が「城崎勉さんの逮捕抗議文が読み上げられ、抗議署名多数集まりました。」とあります。「城崎さんに自由を！」の寄せ書き、闘う人々の連帯に感激しつつ、私も感謝と連帯を伝えます。城崎裁判は来年から始まるとのこと。不当な「反テロ」攻撃、証拠なしで「一事不再理」の原則にも反する攻撃です。何とか勝訴したいものです。集会の様子も伝えて下さってありがとうございます。

「泉水国賠つうしん判決延期臨時号」も受け取りました。判決の筈だった12月24日「口頭弁論再開！」とのこと。何か裁判官の勉強不足？ 8月6日に結審し12月24日に判決だったものが、最高裁判例を誰かに指摘されたのか「親族以外との面会は刑務所長が恩恵的に行っている、その処分に対しては国賠ができない」という最高裁の判例があるが、それに対して意見を述べるか？ と聞いてきたとのこと。これは旧監獄法の判例ながら、最高裁判例解釈という本では、新監獄法にも適用されると解説とのこと。新法では基準を変えたのに思想は引き継いだままであることを示しています。旧法がそのまま生きるとは！この調子で旧法の「親族のみ」に順次戻っているように思います。あいかわず岐阜刑ではまったくひどい処遇が続いていること、泉水さんの優遇区分が三類から四類に降下を言い渡されたとのこと！理由は伝えられません。忍耐強く覚悟も勇気もあるさすがの泉水さんも「もはやこれまで…」という思いにかられた一時があったようで、言葉もありません。ひどい処遇のあり方に、ふうさんらの支え、弁護士らの尽力が泉水さんの心の底を支えて下さっています。泉水さんにも城崎さんにも強弾圧が続く中、何の力にもなれないのが私です。本当に申し訳なく心苦しいです。

12月27日 パレスチナではイスラエルの東エルサレムユダヤ化政策の数々に若者たちが怒りに駆られて決起しては射殺され、10月以来120人を超えているとのこと。またシリアからのパレスチナ難民がガザに避難し、2014年のイスラエル空爆で殺されて人もいるとのこと。あまりに理不尽、不条理。パレスチナ、アラブの世界の辛さが新聞、雑誌の片隅の記事からたちのぼります。パレスチナに平和を！闘いによって、10代の若者が殺されても殺されても、希望より憤怒で立つ姿は世界の不正、歪みの証です。

2015年パレスチナ問題の解決こそ中東の混迷の根本的解決の導きの糸でありながら、米国をはじめとする諸国はそちらに向かいませんでした。反対に中東混迷の原因ではなく、その混迷の結果生み出されたIS叩きに躍起になっています。12月14日に9000回を超える空爆、イラクのIS支配地域の四割を奪還したとオバマ大統領ペンタゴンでNSC後の記者会見。無制限の兵站を持つ米らが勝って当然でしょう。それなのに9000回を超えてなお解決されないやり方こそ問われています。住民はISの支配と空爆の二重の地獄にいます。イラクでもシリアでも空爆をやめて停戦から非軍事的解決を！

この便りがここ八王子から今年送る最後の便りになります。

2016年、世界の大国が「反テロ」の名で益々戦争に向かっているとしていこうとしています。日本も参院選までは船、その後は改憲や派兵拡大で「反テロ」便乗しそうです。

申年、よく目を開き、聞く耳をもち、言論の自由を駆使して反戦そして沖縄、脱原発を！みんなと共に進みたい。

今年の数々の支援、励ましありがとうございます。新年もどうかよろしく。

健康に気を付けて良いお年を！ 房子

12月31日 朝食後すぐの朝風呂は、一番風呂。めったにない機会、湯舟に入ることにしました。まず髪から身体を洗って、残りの時間ゆったりと湯舟

へ。3分くらい！身体が温まって気持ち良いです。ノートメモ化、資料整理、何だか気忙しいまま夕方まで過ぎました。夕食にはカップそばが添えられていて、おそばでお腹いっぱいです。祝日用の菓子は3種。ノートの整理をしているとNHK紅白が始まりました。

新聞では昨日「イラク軍、ラマディ奪還」とのこと。すでに12月に入って、政府軍の優勢が伝えられていました。「無制限」な空爆と兵站で、やっと勝利とは。こうした軍事的攻撃ではISを崩せないことを示しています。空爆能力もなく、兵站到りがあるISを支持するスンナ派の人々は、スンナの盟主を自認するサウジ王政の、米欧と結んだ富の独占と支配、宗派主義への怒り、サウジの「偽イスラーム」への不服従があります。富の偏在、ダブルスタンダード、格差是正なしには「真のイスラームへ」と求める思想を挫くことはできません。

また、仏で顕著なように、同様の不公正・格差・差別の「国内問題」を、反省と検証なしにISに責任転嫁して空爆をしても、矛盾を拡大するだけです。2016年は「IS退治」で、米欧中心主義者たちが、100年前のサイクス・ピコ時代のように、中東を意のままにしようとする動き、その対抗する闘いが中東で広がりそうです。

同質の問題が、日本でも問われそうです。「慰安婦問題」の安倍政権のやり方は、対米政策と参議選の大勝利狙いが明らかです。「少女の像」を撤去など要求するおこがましき。そこにすべてが示されています。

2016年1月1日 元旦！これ以上ありえない程の快晴です。朝、お節料理パックが配られました。内実はともあれ、形でも御節はなつかしい気持ちになります。

届いた新聞、一番胸を突かれ、思わず、ぐっとこみ上げるものを飲み込んだのは、歌人永田和宏さんの新春詠。題は、「恥深く」の二首です。“沖縄を返せ”と歌ひみる我ら「戦う民意」を恥深く閉づ“沖縄を翁長雄志を孤立させて深く恥ずべしわたしもあなたも”この学者歌人、多分京大闘争も学生として共感していた同世代の人ですが、感性が好きです。ちょうど私も、12月2日の、こんな一首を日誌ノートに記しています。“知事出廷「辺野古反対」訴えるヤマトナンチュー恥ぞ痛みぞ”と。意志強く闘いたい2016年です。日本でも中東でも世界でも。

賀状、午後友人たちから受け取りました。いっぱい！とても嬉しい。ありがとうございます。“暁闇に幽けき火の花忽ちに溶けて煌めく新年の光”“無限大メビウスの帯の夢想数多独房の熱き元旦またよし”

世界で、新年はどんな風に迎えられているのでしょうか？

日本は参議選に向けて政局が動きはじめています。安倍政権は、様々な船をもち出して圧勝を狙い、憲法改悪をその次に射程にしています。市民の要求と包囲の中で、野党は有効に闘えるでしょうか。

中東では、大国の空爆から政府軍の地上戦で、ISを軍事的に追い詰めようとする2016年。シリア内戦も「政治的解決」の枠組みによって、アサド政権ではなく、アルカーイダ勢力排除の方向で動き出しています。アルカーイダ勢力含めて、停戦・非戦・政治的解決をシリア人に委ねることこそ必要です。米欧はまた、都合が悪くなれば「構爆弾の責任」など、国際刑事裁判所に提訴してアサド排除も謀るでしょう。排除されるISやアルカーイダ勢力と軍事的決着をつけようとするばかりでは、何も解決せず、軍事的制圧は逆に王政国家から米欧へと様々な問題を拡散していくと思います。

シリアやレバノンのパレスチナ・アラブの友人たちを思いつつ、「希望は持ち続け、闘い続ける限り消えない。今世紀は負けても来世紀は勝つ」と言っていた声を思い返しています。闘うことなしに現状維持すらできない新年です。世界はどんどん荒廃しています。

1月4日 久しぶりのベランダでの運動。患者同士の新年挨拶。「お餅は今日よ。メニューに書いてあったじゃん」とのこと。そうでした。患者が餅をのどに詰まらせたなら即応できるように、元旦3日はやめて、4日になったのでしょうか。今日は4月陽気とのこと。みんな、どんな正月を迎えたでしょう。

こちらは入浴、それから初房内検査がありました。ここの2016年の日常が始まりました。今年もまた、どうぞみな様との交流を！と願っています。友人の賀状にこんな元気な一句。  
“初夢や古希孫悟空大暴れ”

1月5日 今年の動乱を示す如く、サウジの好戦性は「危機」の裏返しとして際立っています。シーア派のニムル師の処刑にはじまり、イランとの国境断

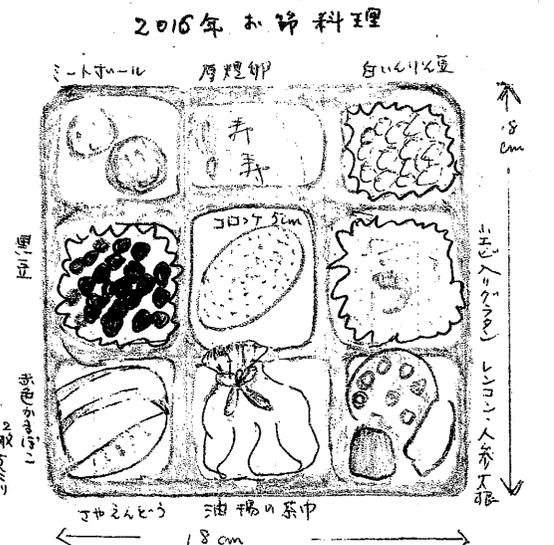
絶と緊張を高めています。サウジは国内では王族内部からもサルマーン王批判が出ていました。前アブダラー国王任命のムクリン皇太子を更迭。ムクリンは母親がイエメン人でイエメンへの空爆軍事介入に反対してサルマーン王に皇太子を剥奪されました。その代わりにサルマーンは甥を皇太子、息子の若者の好戦派ムハンマドを副皇太子に指名して軍事や統轄をまかせています。この親子コンビが宗派戦争の震源地です。

「ISの生みの母はブッシュのアメリカ、父はワッハーブ主義のサウジアラビア」と中東では言われています。ISは支配地ではサウジの小学校教科書を使い、シャリーアの刑罰もサウジと同じものを採用、つまり遅れてきたワッハーブ主義者がISです。ISの最終ゴールはサウジのヒジャーズ地方のマッカ、メディナの聖地を征服することを、イスラーム世界のカリフ制の完成と考えているのでしょうか。そのため双方激しいヘゲモニー争いが続いています。同じ教義なので「ISの方が真のイスラームだ」という国民や宗教指導者もいて、サウジ王政は危機感を持っています。そこにISは国内シーア派を攻撃することでサウジ王制を弱らせる戦略をとって、14年から自爆攻撃を続けてきました。ワッハーブ主義ではシーア派は背教者であり、シーア派攻撃は支持する者も多いのです。サウジは対IS、対イラン加えて国内対策としても自分たちのリーダーシップを取り戻そうと冒険的です。

去年「情況」誌にも「サウジアラビアの新王政と覇権」を私も書いたのですが、危惧は対シリア対イランへと広がっています。イスラエルは対イラン包囲を盛んに狙っていくでしょう。イランは反イスラエル、反植民地主義が強固ですから。中東問題を考える時常に米欧はイスラエルの安全保障第一に考えつつ、それは隠して発言しています。

1月6日 夜明け方燃えるような晦の細い月、きれいで見とれてしまいました。

世界のニュースが新年から激動中。北朝鮮が「水爆実験」とか。IMF専務理事ラガルドによると紛争は世界中に起き、故郷を追われた人は世界で6000万人。15年は米利上げ観測。中国の景気減速、石油など資源安でこれらの輸出に頼る国々に問題を突き付けて貿易鈍化させた。金融システムが安定していない。そうしたことから今年の世界経済は成長にばらつきあり、全体としては不本意なものになる



だろうと語っています。グローバル自由経済の格差は国と国との関係、国内の格差を広げ「成長幻想」に代わる経済の民主化、社会的公平なしには貧困化も難民化も広がるばかりです。

- 年賀状読み返すといろんな姿が浮かびます。
  - \*年末ペースメーカーの手術をしました。
  - \*昨年は国会前に一人で4回行き、若者、子どもづれの女性にも感動。あなたも生きぬいて下さい。
  - \*沖縄へ行きたし沖縄は沖縄に返せ。
  - \*過る時代の歴史学ばんとはだしのゲンを若きらと読む。
  - \*胆力のゴリラ見据える山の春。
  - \*「戦争法」狂行した安倍政権に命をかけて戦う部隊の不在!
  - \*殺し殺される世界でなく共に支えあって生きられる“これからの世界”を創り出したいものです。
  - \*大変な時代になってきました。考え動くことをやめるつもりはありません
  - \*東北ボランティアは10回、今は町内会で新聞ポスター作っております。
  - \*いよいよ正念場お元気!!
  - \*NPOに係り、毎日忙しく過ごしております
  - \*今年は正念場です、みんなで力を合わせて進みましょう。
  - \*短歌は時代を映します。
  - \*7・6事件の前後の不思議な事象検証中です。
  - \*まだどこかあどけなさの残る高校生たちの懸命さに心打たれ、決意新たにしました。
  - \*市議選再挑戦です。お互い会えるまでがんばりましょう。
  - \*昨年12月以来入院しています。(回復祈ります)
  - \*なんか激動の年となりそうです。やられてたまるか! 倒れし者たちともに。
- 他いろいろです。私も激動の時代いつも仲間たち友人たちと共にあることを誓っています。

1月15日 学習したかった本「鉄の壁」上・下が届きました。「イスラエル史再検証主義派」とか「ニュー・ヒストリアン」といわれる一人であるユダヤ人歴史学者アヴィ・シュライム著「鉄の壁 イスラエルとアラブ世界」という本。ニュー・ヒストリアンは、イラン・パペなどもそうです。この「鉄の壁」はイスラエル建国から2006年までの歴史を記しているものです。高価で買えないところ「支える会」の英断!で差し入れてくれました。良く学習し、学

びたい人に回覧していきたいです。本を見て、訳者がもしかして2.0代の頃の知りあいかも……とびっくり。まず学習します。感謝。

水谷さん著書(「革共同政治局の敗北」)が図書館協会の「選定図書」に決まったとのこと。広く多くの人に読まれる機会が広がっている様子、よかったですね。引き続いて総括を深め、次の稿を進められている様子、前向きな仕事ぶりに感心するばかりです。

私たちが「日本赤軍時代」に70年代「新左翼主義総括」を、外から日本列島をとらえる想いで記したことがあります。80年か81年に訪ペイルート中のウニタの遠藤さんと高島喜久男さんとお会いし、討議したところ、私たちの内容に賛成くださり勧めて下さって本にしたことがあります。「大地に耳をつければ日本の音がする」(亜紀書房刊)という、ウニタさんのつけた不思議なタイトルの本です。これまでの自分たち含めて、「党」について、「党の役割」についてとらえ返した内容です。

総括の内容や歴史も違いますが、僭越ながら読む機会がありましたら、目を通してみてください。私自身、読む機会がなく過ごしているので、機会があれば読み返してみたいと思っている本です。……当時の教訓から言えば、運動戦の突出にのみ指導性を求め、競合しあった党派のあり方は、否定的側面も多かったと思います。もっと合法性を最大化して「対抗社会」を形成する闘い方もあったな……と。

1月18日 夜中に起きて窓の外を見たら銀世界です。起床時は粉雪が舞い、初雪はみごとに樹々や建物を円やかに白く隠しています。でも午前中から雨に変わり、樹々の雪は溶けてしまいました。それでも積もっていたせいで、地面は雪に覆われています。

丁度届いたYさんの便りに「今朝の東京新聞一面に森本さんの句が入賞して載っていました。“サンシンの響きにこもる平和かな”作者の名前を見ないで森本さんみたいな人がいるな—と思って名前をみたら森本さん。ビックリ!」と、あります。

1月20日 今日快晴ながら最高7度~最低マイナス3度と寒いので、雪は溶けていません。明日の大寒のこの季節、八王子はこれから2月が、本格的な寒さに入ります。

「はなかみ通信」新春の号受け取りました。今号は「特集鶴見俊介さんと私」で、ほとんど有名・無名

の方々、鶴見先生との様々なエピソードを語っておられます。先生の少年のままの好奇心、創造性と博覧強記に、万人平等の人と人との関係が浮かび上がってきます。どれも嗜みしめる味のある分。でも今回Sさんの連載は、特集紙面の都合で休みとなり、かけがえのない数多の鶴見先生とのエピソードをもつSさんは執筆していません。他の方々に紙面を譲られたのかもしれませんが、体調気がかりです。

1月22日 寒さのせいでカラーもガーベラもかすみ草も元気。机の上に花があるだけでとてもいい気持ちです。

小林さん本送って下さったとのこと感謝。「高校紛争1969-1970」の著者ですが、その際「1960年の高校生の意識をずいぶん調べました。その時集めて資料の中に『高校生の生活と証言・海つばめの歌』がありました。これは重信さんがお持ちになった方がいいと思い送ります」と、送って下さったとのこと。高校時代に私が書いた掌編「朝鮮の子」(原題は「姉弟」でした)が載っている本は半世紀近く前発刊された時に読んだだけで、以来入手はできないものと思っていました。びっくりですが楽しみに読み返してみます。

1月25日 宮城から送って下さった「プチの大通り」ずいぶん久しぶりに受け取りました。感謝! 浴田さんの童話「みんながみんなの先生だった」は手書きの分をすでに読んだことがあります。いくつかの作品の中で私が一番好きな小説です。また「栃木からの便り」出所後のことなど興味深く読んでいます。

1月27日 空気が凍っているような寒い中、姉が面会に来てくれました。体調も悪いのに無理させて申し訳ないです。楽しい一時でした。

戻ってすぐに診察。肺炎の予防接種のための説明とアンケートをうけて署名指印の上で薬名「ニューモバックス」の予防ワクチンを注射しました。その後CVポートのフラッシュ。そして2月にはCT、大腸、胃の内視鏡検査を行うので、その検査承諾書に署名指印しました。大腸には去年2月に「様子を見ましょう」と経過観察中の粘膜下腫瘍が発見されていたのですが、それがどうなっているのかがチェックのポイントです。年齢から急速には大きくならないとのことでしたが。



1月29日 八王子は最高温度5度。これから2月が更に寒くなります。朝、小雨が降って、1月18日の残雪を溶かしています。でも、まだまだ雪は残ったまま。

雪になると、「連赤」の友人たち、遠山さんたちが浮かびます。そしてベカーのキャンプも。今頃は、ペイルートとダマスカスを結ぶ標高2,500m近い山並みを通るベカーへの道は、雪に閉ざされていることでしょう。そして、シリア内戦から避難してきた人々は、国境からベカーの辺りで厳しい寒さに遭っているのだらうと思います。

対IS空爆は既に9,500回以上。3万発を超える爆弾を有志連合・米国らは使用したとのこと。数百万の住民たちが、どれだけ虐殺されているのか……。ロシアの軍事介入も同様です。しかし、ロシアの軍事介入が、米欧一辺倒の「シリア問題」解決を、「非現実的」から少し「現実」に近づけてきたのは事実です。「アサド政権排除」を前提としないこと、イランを中東の主要プレイヤーとして、シリア問題協議に招請したことです。

それによって、12月の安保理決議による「緊張緩和」にむけた動きが生まれました。でも安保理決議は絵に描いた餅です。①政権移行プロセスの交渉を1月から開始すること ②6か月以内に「信用できる包括的な無宗派の統治体制」の設立 ③新憲法制定の日程や手順を定める ④18か月以内に「自由で公正な」選挙実施 ⑤政権移行は「シリア人主導で」 ⑥市民への暴力の即時停止 ⑦停戦監視の方法を1か月以内に決める、などと決定しています。

問題は、排除された武装勢力が力を持っていること、また「イスラーム軍」ら宗派武装勢力も、サウジの意向を受けて参加するか、しても合意は難しいこと。今後も、アサドの政権参加をめぐる対立は続

くことです。自由選挙すれば「アサド再選」となるため、サウジら反体制スンナ派勢力（スンナ派すべてを代表していない）は、米欧の力をもって、アサド・バース党排除のうえで、シリアは問題を解決したいでしょう。この安保理決議の大国の「意図」は、儀式のように手順を踏みながら、対IS戦に、アサド政府軍と反体制派を一つにして向かわせようということのようです。反体制派は政府軍よりイスラ戦線ISと近いのに。

それよりも、むしろ安保理では「地域主要国で解決せよ」という決議こそ必要です。米欧口も介入せず、イラン、サウジ、トルコ、エジプト、シリア（現政権）によって話し合う場を強制する方が有効です。なぜなら武器や資金で騒ぎを大きくしてきたのは米欧であり、地域の国々だからです。米欧が介入せず、武器も流入させなければこんな事態には至りません。2003年、ブッシュのイラク侵攻以降、介入方法は違っても姿勢は変わっていないことが問題なのですから。シリア人が決定できるようになるのは、まだまだです。シリア内で少しずつ広げている停戦・非戦闘地域の拡大に期待しつつ。

また、パレスチナでは、イスラエルによる「エルサレムのユダヤ化」入植地の拡大・永続化で、ネタニヤフ政権は益々凶暴です。ネタニヤフが祖と仰ぐジャボチンスキーが1920年代に唱えた「鉄の壁戦略」によるイスラエル作りは、修正シオニストも、ベングリオンら労働党らのシオニストも同じでした。

「ユダヤ人の建国事業と先住アラブ人は、自発的に合意は不可能。彼らと合意によって国を作ると考えるものは、シオニズムを放棄するしかない。これを自明のものとして入植を続けよ。先住民と関係なく、実力で防衛し、アラブ人らが破壊できない鉄の壁を打ち立てる。アラブ人らがユダヤ人を排除する望みを放棄せざるを得ない力を我々が持った時、彼らは運命的結末に従うだろう」というもの。

その為には、何よりも「力の絶対的優位」「予防（先制攻撃）戦略」「報復」によって知らしめるというやり口。シオニストのリーダーは、当初からの侵略と征服支配の性格をもってしか成立しないことを知っていたわけです。優位に立てばつほど、更に拡張の野望を燃やすというのがシオニズム。ネタニヤフらの支配を押しとどめるためには、パレスチナ問題の国際化（2015年11月9日、スペイン最高裁が、イスラエルの戦争犯罪に対し、ネタニ

ヤフら7名に逮捕状を出している。国際刑事裁判所の活用や BDS キャンペーンの更なる拡大による国際共闘など）と、現地の抵抗運動の統一的展開です。

今年は益々緊張しています。10月以降パレスチナ人の襲撃で死亡したイスラエル人は1月下旬現在24人、殺されたパレスチナの若者144人とのこと。（ニューズウィークによる） アッバス自治政府大統領批判も増大し、インティファダによって、イスラエルの「民族浄化」に立ち向かうべきという声が圧倒的に多いとのこと。中東はこの「イスラエル問題」を避けては、最早崩壊を繰り返すばかりです。

1月31日 週末は何冊も SEALDs 関連の本を読みました。私が SEALDs の実情を把握できるようにと送って下さったものです。感謝。

「SEALDs 民主主義ってこれだ！」には、参加する個々のみずみずしい自身の想いや言葉に溢れています。そうだった、私も。私の友人たちもそうだった……。遠山さんともそのように活動の参加の契機を語り合った……。けれども、それはあくまでも「私的領域」に留められ「政治の場で語られることは、はばかられたような。公の場では語られなかった「私」と「政治活動」を本音と建て前のように二元化していた姿が浮かびます。

当時と今では時代も条件も違うことを前提に比較してみると、(もちろん学内自治、学問の自由を求め、野党も強力で、運動の大きさもまったく今とは違いますし) 当時の私たちの運動は「突出すること」「純化すること」に理論的にも運動的にも重点を置いていたように思います。今の SEALDs は、人々と「コミュニケーションすること」に重点と力を注いでいます。その違いは、当時、社会関係の中に自分たちを位置付けず、自分たちの「正しさ」に邁進し、他者や状況などの外的なものを批判しつつ、自らを省みることのできない傲慢な闘い方になっていったのでしょうか。「正しさ」「唯一」を競い合い、益々党派は狭くなっていきました。

「自らを批判する目」をもった人々は、党派を乗り越えて「自己否定」とか「分」をわきまえて闘うとか、社会の諸関係にかえて持続的に闘い続けたと思います。私も党派的な流れの中で、海外に発ちました。そして様々な闘いの現実におれ、ふりかえった日本をとらえ、「自らを変えることなしに世界は変ええない」と、自明のところ立ちました。そして、

「自己変革・自己批判を指導性として、共に現在を変える」を活動のモットーとして、何でも語り合いました。「現思研」の時のように「雑談、本音」を大切にしながら。個々のみずみずしい本音や想いを、

★読んだ本★

「高校無償化裁判 249人の朝鮮高校生闘いの記録」(月刊イオ編集部編・樹花舎刊) 読みました。感動的です。ひたむきな民族の尊厳と、そして当たり前の願いを叶えたい日本に住む高校生が、いかに差別されているのかがとてもよく分かる本です。

2010年4月、民主党鳩山政権で実現された「無償化制度」は、外国人学校を含めたすべての生徒を対象という画期的なものでした。ところが朝鮮高校だけが排除され、それに対して、なぜ差別されるのか? を問い、それを安倍政権がどのように悪化してきたのか。

国連からも是正勧告を受け、国連人権差別撤廃委員会、国連・子どもの権利委員会、国連・自由権規約委員会、社会権規約委員会などで、審議、懸念と韓国など示され、国際化しています。鳩山内閣の中井拉致問題担当相が朝鮮高校を無償の対象からはずすよう言い出し、「拉致問題」「北朝鮮、朝鮮総連」といった政治的理由を持ち出して以来、排除されてきたのです。

2010年4月から、国は、公立高校の授業料相当分の一人年118,800円を「就学支援金」として支援していますが、唯朝鮮高校生のみ、今もその支援が受けられていません。2013年から「無償化」を求める裁判を国に対して起こし、裁判、行動、国際的な支援の中で、今も各地で裁判が続いています。

日本人の広い支援もあり、大阪府庁前では毎週火曜日「無償化」実現と、大阪府・大阪市の「補助金支給再会」を求める「火曜行動」を行っています。本の中に、森本忠紀さんのコメントもあります。忠紀さんは、火曜行動「火曜バンド」の一員で、三線を担当中。「差別状況を知らないというのは、知らなくても済む立場にいるということ。知らずに差別に加担してしまうことに、恐れを持つべきです。ただ、自分ひとりだけそこから解放されてもダメ。みなで解放されなければ、政府と行政のやり方を改めさせるのは、私たち日本人の義務」と忠紀さん。

この本を読むと、45年敗戦後自民族の言葉を学

くらしから政治の深さへと創り続けて欲しいと思いつつ読みました。違いのある人も決して排除せずに。「サンルームのつもり獄舎の窓の日を浴びつ若きらのSEALDsを読む」



ぶために始まった朝鮮学校の歴史と、日本政府行政の一貫した差別妨害がどう行われてきたのか、とてもよく分かる本です。

以下に、第4章 民族教育をめぐる権利闘争の歩みの中から、歴史的な記録のいくつかを拾って紹介します。

講習所から学校へ

1945年8月15日の祖国解放後、在日朝鮮人は日本の植民地支配下で奪われた民族の言葉を取り戻そうと、日本各地で手作りの「国語講習所」を次々と開いた。現在の朝鮮学校の直接の期限は、この国語講習所に求めることができる。

45年10月に結成された在日本朝鮮人連盟(以下、朝連)は民族教育事業に力を注ぎ、翌46年4月ごろから国語講習所を3年制の初等教育施設へと整備、改編させる。その多くは「初等学院」の名称が用いられ、科目も国語(朝鮮語)のほか歴史、地理、算数、体育、音楽などを教えるようになった。資料によると、46年6月10日時点で朝連中央総本部が掌握していた初等教育施設は206校、児童1万6502人、教員326人。同年9月、学校は3年制から6年制へと移行し、10月には日本全国で525校に児童4万2182人、教員1032人へとふくらんだ。初等教育施設のほかに「青年学院」12校(生徒724人、教員54人)を合わせると、当時の在日朝鮮人の民族教育施設は537校、児童・生徒4万2906人、教員1086人に上った。

第1次学校閉鎖令と4・24教育闘争

敗戦国日本を占領していた連合国軍総司令部(G

HQ)と日本政府は当初、在日朝鮮人の民族教育を容認する姿勢を示していたが、冷戦の急速な深化を背景に、朝鮮学校に対する弾圧政策に舵を切る。47年、GHQ民間情報教育局は「朝鮮人諸学校は、正規教科の追加科目として朝鮮語を教えることを許されるとの例外を認められるほかは、日本のすべての指令に従わしめるよう、日本政府に指令」した。この指令に基づき、日本政府は48年1月24日、「朝鮮人設立学校の取り扱いについて」と題する文部省学校教育局長名義の通達を各都道府県に送付。◆学齢期の朝鮮人子弟も日本人同様、市町村立または私立の小学校、中学校に就学させなければならない。◆私立小学校の設置は都道府県知事の認可を受けなければならない。◆学童児童・生徒の教育については、各種学校の設置は認められない、という方針を示し、従わない場合は学校を閉鎖するよう命じた。

### 第2次学校閉鎖令

翌1949年9月8日、GHQと日本政府は「団体等規正令」を適用して朝鮮学校の運営母体であった朝連と民青(朝鮮民主青年同盟)を強制解散に追い込んだ。これを機に日本政府は、◆朝連が設置していた学校は廃校として処置すること、◆朝鮮学校に在学する児童・生徒は公立学校に収容すること、◆教科書は、「国定教科書」または「文部省検定教科書」を使用すること、◆朝連関係者は学校から排除する、◆教育内容や名称において朝連を想起させる一切のものを払拭することなどを命じた(文部省管理局長・法務府特別審査局長共同通牒、49年10月13日)。

(中略)こうして朝鮮学校はその始まりから4年あまりで、非合法の存在となってしまった。

### 転機となった総連の結成

1952年4月28日、サンフランシスコ講和条約が発効され、日本は米軍を中心とした連合国軍による占領状態を脱し、主権を回復。同時に日本政府は、在日朝鮮人は「日本国籍を喪失」し「外国人」になったと一方的に宣言する。そしてこの措置に基づいて、これまで「日本国籍保持者」であった在日朝鮮人の児童・生徒たちに日本学校に通うよう強制してきた態度を一変させ、日本学校への就学を「恩恵」として「許可」と言う方針に転換していく。53年2月1日には文部省初等中等教育局長通達を出し、在日朝鮮人児童・生徒たちに適用してきた

「日本学校への就学義務」を取り消した。ただし、「日本学校への就学要望があれば、日本の法令を守れることを条件に事情の許す限り許可してもよい」とした。東京では、「外国人」となった在日朝鮮人の教育について日本政府や都が責任を負う必要はないとして、都立朝鮮人学校の廃校が進められた。

公立から外国人学校へと変わった朝鮮学校は全くの無権利状態に置かれた。このような経緯から、朝鮮学校側は後にやむなく各種学校の認可を求める取り組みを始めることになる。

在日朝鮮人の民族教育においてターニングポイントとなったのが55年5月25日の在日朝鮮人総連合会(総連)の結成だった。学校の強制閉鎖によって一時的に受難の時代を経験した朝鮮学校だったが、総連結成を機に再生と発展への道を歩んでいくことになる。総連は新校舎建設や教科書編さん、教員育成など学校運営の整備を図るとともに、学校の法的認可の獲得を民族教育事業における主要課題として取り組んでいった。

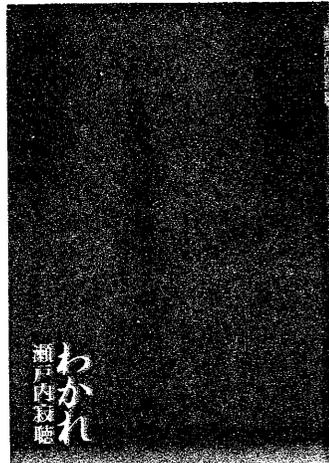
また、57年4月に送金が始まった朝鮮からの教育援助費と奨学金も、各地の学校の再建に大きな助けとなった。(10月25日)

\*\*\*\*\*

大谷弁護士から新刊「わかれ」(瀬戸内寂聴著・新潮社)を送っていただきました。この本の中には、九編の小説が編まれています。その一つが「面会」という題で、私との面会の時のことを作品にされたものです。そのため、今回送ってくださったのだと思います。

この「面会」の短篇は、前に寂聴先生が編集していた「THE 寂聴」という雑誌に初めて載った作品です。すでにその折一度拝見しておりました。改めて読み直しています。

この「わかれ」の九篇の中で、「山姥」と「紹興」、その次に「道具」が好きな作品です。「山姥」に登場



する人と人との関係は心を浄化されるような読後感があります。私にとっては、獄の外の旧友や新しく出会う友人たちと心が共振することと、どこか重なります。ひたすら無償に人として向き合うからでしょうか。

「山姥」では、周平と耀子の見て見ぬ振りする優しさとかも、いいなあと思いつつ読みました。

「紹興」が好きなのはやはり秋瑾のことに触れているからです。菅野須賀子もそうですが、男が牛耳り制圧する時代にあって、革命の使命感に自らを捧げて、全人格的に尽力した秋瑾の姿が文から立ち上ります。この「紹興」には、一番著者の芯が感じられる私です。瀬戸内文学は他者を肯定し、良い側面を引き出す人間観がいつも読後感を清々しく心地よいものしてくれます。この本「わかれ」の読後感もそうです。

「面会」は、私の弁護士と私を描いた作品ですが、寂聴先生に無理させたようで、読む度に気が引けてしまいます。先生とは近しく過ごしたことがない私のことを過分に描いてくださって、恐縮しつつ読んでいます。

この「面会」の物語は、寂聴先生と「連赤事件」などで、長い付き合いのある大谷弁護士の人物像がいきいきと描かれているところが読み易さにつながっていると思いつつ、読みました。

また、ちょうど新潮社の冊子「波」の11月号が届いて、「分かれ」が届く前に、この著書の「書評」を読んだところでした。評者は田中慎弥で「分かれ」を「小説らしい小説」として評論しています。私はこの人の芥川賞作品は読んだことがありますが、それしか知りません。何故この人に「書評」を書かせたのかと少し違和感で読みました。私から見ると「紹興」への評も素通りするような一文で、気に入らませんでした。この寂聴さんの本の書評は断然女性であるべきだと思いつつ書評を読みました。

そのように思ってしまったのは、田中慎弥の次のような一文が気に入らなかつたせいでもあります。反省を込めて言えば、この一文は当然の常識なのでしょうけれど……。田中慎弥は、

「『面会』では、テロリストの重信房子に会いに拘置所へ行く。有名な作家がなぜ犯罪者に親しくするのかと、疑問や反発を持つ読者もいるだろう。その感想は社会的に見て全く正しい。作歌もテロリスト同様、社会性をどこかに置き忘れてきた種族なのかもしれない。反社会性を行動に移すテロリストより

言葉で闘う作家の方がしたたかで人間離れた存在だ。テロリストは、人間以外の者ではなく、作歌は人間に似た何かだ」と記しています。

そういう言い方をするのなら、人間的であること、徹底して人間に拘ることは、革命家と同義であると思います。それはテロリストではありません。「テロリスト」という呼称が許しがたいのは、そこに権力側の意図の歴史があるせいです。80年代初期、レーガン政権は「低烈度戦争戦略」を規定しました。

「国家」でなく「革命組織」・「解放組織」と闘う戦略です。革命と解放の「正義性」を奪い、破壊するために、分断、潜入、宣伝など、大統領令で決めました。その一つが「テロリスト」呼称です。これまでの革命組織とか解放組織を「テロ組織」と呼び改め報道し、何百万、何億回繰り返すことで、革命と解放の「正義性」を奪うというやり方です。それはすでに定着してしまったこと、そしてまた、私たちが限界ある闘いを行ってきた70年代含め、闘う側の問題でもあることを、苦く思い返します。

その書評から離れて、「わかれ」をまた読み返しています。寂聴先生の作品は年齢を越えるたびにのちにかかわり、若々しいエネルギーが生まれるように感じています。

ちょうど逮捕から15年目の日に。(11月8日)

| 132号の誤植の訂正とお詫び  |                                |
|-----------------|--------------------------------|
| 2頁6行            | 臨海→臨界                          |
| 3頁右列下から10行      | 「犯罪・司法」→犯罪として司法                |
| 8頁右列19行         | 信頼→信任                          |
| 9頁左列10月2日の12行   | 勝った→買った                        |
| 11頁右列下から5行      | エタニヤフ→ネタニヤフ                    |
| 12頁左列10月22日の12行 | チョコ味封→チョコ味風                    |
| 13頁右列10行        | 例に→側に                          |
| 14頁左側下から16行     | CITIES→CITIZEN                 |
| 14頁右列下から24行     | 昼間孝→昼間たかし                      |
| 14頁右列下から18行     | 「ルポルタージュ人間→<br>「ルポルタージュ・人間     |
| 15頁左列下から10行     | 退却せる→退却せよ                      |
| 16頁は列下から20行     | いくつ物→いくつもの                     |
| 16頁左列下から16行     | イマンデあり→イマンであり                  |
| 16頁右列3行         | 作ってしまったのか……。→<br>作ってしまったのか……。」 |
| 16頁右列11行        | れている怖い、→れている。怖い                |

## 中東2016年—「サイクス・ピコ密約」から百年(上)

重信房子

- 1、中東の現在
- 2、英国の「三枚舌外交」
- 3、三枚舌外交の果て
- 3、「サイクス・ピコ時代」の遺産
- 4、中東の問題を中東で解決する道へ

### 1、中東の現在

中東は、古代から多様な民族・宗教の揺籃の地である。その様々なたくさんの文化が生まれてきた。今でもその営みは変わらず、億万人の人々が町や村で、家族、隣人と慈しみながら、暮らしている。その一方で、過剰な武器の流入氾濫は人々を共存から安易な対立へと広げた。もちろん武器ではなく、人間が対立を広げたのだが、武器を持つことによって、対立はさらに非和協的なものに増殖し、人々の暮らしを引き裂いている。

中東の戦乱は、2015年西欧世界にも拡散し続けた。2016年も、無事の人々の命を奪う空爆、無差別「テロ」による民間人殺傷、住民の難民化が解決に向かう徴候はまだ見えない。

2015年12月14日、米国防総省で開かれたNSC(国家安全保障会議)後に、オバマ大統領は演説し、すでに「有志連合」によるイラク、シリアへの空爆は9,000回に達し、イラクのイスラーム国(以下IS)支配地区の4割を奪還したことを明らかにした。12月28日には、イラクのアバディ首相も、アンバル州の州都ラマディをISから解放したと述べた。そして「2016年はISに対する最終勝利の年にする」と宣言している。

米国ら「有志連合」による無制限な空爆、軍事兵站力を誇る勢力と、兵站補給力の限られているISとでは、もともと「非対称」の戦争に過ぎない。9,000回もの空爆と巨大な軍事財力でも勝ち得ないのは、軍事以外の解決の道を開くべきことを示している。にもかかわらず、2015年の「11・3パリ事件」を奇貨として、12月1日のNATO外相会議を経て、さらにNATOが本腰を入れて中東の戦乱に乗り出してきた。

これは、明らかにロシアのシリア軍事介入の影響といえる。ロシアの空爆と連携してイラク、シリア

政府軍、イラン革命防衛隊やヒズブッラーが一定の戦況段階で地上戦を闘う構想が見込まれているからであろう。米国を中心とするNATO勢力は、この「ロシア主導」の地上戦構想が進むことは受入れがたいのである。「トルコ防衛強化」「対IS戦強化」を大義とするNATOの動きは、中東における米欧支配のヘゲモニー回復を目指すものと言える。つまり、NATOの下にロシアを統合し巻き込むこと、さらには、対ISの闘いとしつつ、対ロシア包囲が含意されていると見て間違いない。

プーチンは戦略的に、それら米欧の動向を見据えつつ、「対IS国際包囲」を打ち出してきた。そして、ロシアは12月31日、2016年の新しい国家安全保障戦略を明らかにした。そこでは、外国機関の諜報活動や親西欧勢力による政権への挑戦を警戒している様子が示されている。そして、「西側の姿勢はロシアの国益実現に悪影響を与えている」と批判し、西欧への配慮や譲歩よりも国益外交を徹底していく方向を示している。中国については「全面的パートナー関係と戦略的協力関係の発展」を謳っているという。2015年は、ロシアの政治イニシアチブにもかかわらず、西欧のロシアに対する冷戦期のような対応は、ロシアを中東における影響力行使へと向かわせたといえる。ウクライナ問題ばかりか米欧中心の「市場民主主義」的価値観からNATO東方拡大やMD配備に至るまで、不本意な扱いを受けたという考えがこれまでもあった。中央集権的な伝統的ロシアの国家主義的統治によってたつプーチン大統領としては「我が道を行きつつ、相手の出方次第」を進むようである。しかし、ロシアも「経済制裁」に加えて、米国の原油輸出解禁などの引き続く原油安で、経済的苦境の2016年である。

こうした大国の攻防も反映した対IS対「反テロ」軍事行動のエスカレートは、住民を苦しめるばかりか、アルカーイダやISの戦略構想に嵌ったような動きである。2005年に、後のISに連なるアルカーイダ系の者たちが語ったという「戦略構想」によれば、2001年の「9・11事件」を「目覚め」の時期とし、2013年から2016年の間に、「カリフ制国家」を打ち立てるという計画であった。彼らの計画によれば、その後は、2020年にか

て「反カリフ国家勢力」との全面対決が想定されていた。米欧勢力との対決は不可避ととらえているのである。その戦争の一形態として、欧州などを戦場として拡大しているといえる。ISは、「空爆」という手段を持っていないので、彼らの方法で闘わざるを得ない。それが自爆戦争による反撃の世界化なのである。

ISは、第一に、自爆によってこれまでも戦局を切り拓いてきた。そして、第二に、攻撃対象を意図的に民間人への無差別攻撃を行うことによって、恐怖させる戦術を取ってきた。さらに、シーア派イスラームをターゲットとすることで、宗派戦争を引き起こし、これまでの中東の秩序を混乱させてきた。こうした勢力への空爆の拡大強化は、民間人の人命を奪い、戦場を拡散し続け、解決には至らない。

中東では、「ISの生みの母はアメリカであり、父親はサウジアラビアだ」と言われているという。2003年ブッシュ政権による米軍のイラク侵略にはじまる中東地域の戦争の泥沼化と厳格なワッハーブ主義のサウジアラビアの資金による教義の拡散やモスク、神学校の建設が、ISらアルカーイダ勢力を育成したためである。ISは遅れてきたかつての20世紀初頭のサウード・ワッハーブ連合であり、宗派征服は同じ道筋を歩んでいる。そして、サウジアラビアのヒジャーズ地方の聖地マッカ・メディナの守護者となるべくISはサウジと競合しあっている。ISのカリフ・バグダーディーは不信心者サウード王朝打倒を目指しており、イスラーム・スンナ派の権力闘争も一方に広がっている。ISの発生・成長史を辿れば「ISの生みの母はアメリカであり、父親はサウジアラビア」というのは、肯くことができる。

今や、サウジは宗派戦争の震源地であることが明らかになっている。新国王とその息子らの動きは、シーア派指導者のニムル師処刑に示されるように、好戦的挑発的である。「アラブ対イラン」「スンナ派対シーア派」の対立を煽るのは、制裁解除間近のイランへの危機感であり、対ISサウジ国内対策もあるのだろう。

こうした騒ぎの焦点化の一方で、同じ中東のパレスチナでは、イスラエル政府による迫害は巧妙にかつてより深刻に続いている。2014年夏、イスラエル軍はガザ地域を侵略、空爆し、2,200人以上のパレスチナ住民を殺害した。(うち民間人は1,600人以上。そのうちの500余人が子どもだっ

た。)負傷者は11,000人の住民(ほとんど民間人。うち、子ども3,300人。)家を失った住民110,000人。病院、診療所の被害は66カ所にのぼっている。しかし、2015年には、各国からの復興資金は約束通りに拠出されなかったばかりか、復興を妨げるイスラエル政府のガザ地区封鎖が今も続いている。いまだに、2016年に入っても、被害状態から復興しえず、厳しい生存の闘争を強いられている。

その一方で、2015年、占領下の西岸地区のパレスチナの聖地エルサレムでは、ネタニヤフ政権のもとで、これまでありえなかった事態に至っている。67年にイスラエルに占領されて以降もユダヤ教徒に礼拝立ち入りが禁止されていた「神殿の丘」に9月礼拝立ち入りを許可した。そして、このユダヤ優遇政策のために、もともとそこにあるイスラームのアルアクサ・モスクでの礼拝が禁止、あるいは制限され、抗議するパレスチナの若者たちは、銃弾によって殺され続けた。憤怒に駆られた十代のパレスチナの若者たちの射殺を覚悟したナイフやハサミによる仕返し行動も起こった。2015年10月から12月中旬までの間に、イスラエル人は19人殺されたという。

しかし、イスラエルの治安部隊は、無抵抗の若者を含めて同じ時期118人を殺している。パレスチナの首都となる占領された東エルサレムの「ユダヤ化」、シオニスト支配はとどまるどころを知らず、イスラエル政府の民族浄化政策は一層厳しさを増している。しかし、「アラブ・パレスチナ中東和平」は「IS問題」の脇に追いやられたままにある。「IS掃討」の大義のもと中東は空爆で破壊され続けた2015年であった。

米欧にロシアも加わった間断ない空爆によって住民は殺され続けている。ISの征服下に置かれた数百万人といわれる住民たちは、ISの恐怖支配の上に、さらに空爆によって、いつ殺されるか不安な二重の地獄に生きながらえている。未来から見た現在は、欧米中心主義秩序の崩壊過程に、ただ軍事力による破壊行為で押しとどめようとする姿として、歴史に記されるだろう。

米欧の「大国」間だけの「合意」によって世界が支配され、秩序のルールが決定され押し付けられる時代は終わっている。イスラエルの核兵器問題やパレスチナ・アラブ領土の占領問題から国連気候変動枠組み条約に至るまで、米欧ら国連安保理事国と国

連総会の国々の総意の乖離という国家レベルの現実を見ても明らかであろう。米欧はこれまで覇権や利権で特権的に収奪してきた富や決定権を「返却すること（つまり、「これまでの不正を改める」に過ぎないのだが）が問われる時代なのである。こうした現実を直視せず、「民主主義」「自由・平等・博愛」のもとで、空爆が続けられている。「民主主義」や「自由・平等・博愛」のレトリックは選ばれた地域の選ばれた者たちだけのものなのか。中東・アフリカ地域には軍事攻撃による解決しか施されない。「自由・平等・博愛」の看板のもとで、仏はそれらの地域で植民地宗主国としてほしいままに利権をむさぼり、現地住民を利用してきた。今では、それらの歴史的繋がりのある自国民を「同化政策」によって移民やイスラームの自由を締め上げ、罰則まで科している。

「11・13パリ事件」は、ISの問題以前に仏の格差社会が生み出した問題である。これを問わずに、かつてブッシュのイラク侵略戦争に反対した仏で、オランダ大統領は、ブッシュの科白のごとく「我々は戦争をしている。これは戦争だ」として、IS軍事攻撃に益々踏み込んでしまった。米欧で起きている民間人に対する「テロ」の第一義的責任は、自国内における移民出身の国民に対する政府とその政策にある。しかしその検証はさしおいて、仏は旧植民地の宗主国として、自らの権益のためにアラブで、アフリカで、軍事介入を続けている。百年前と同じように。

今年「サイクス・ピコ密約」からちょうど100年目にあたる。ISは「カリフ制国家宣言」と同時に、「サイクス・ピコを葬る」と宣言し登場した。

「サイクス・ピコ密約」はなぜ現在の問題として語られるのか？

「サイクス・ピコ密約」に始まる国境に引き裂かれた中東の人々の不信と恨みは過去のものではない

## 2、英国の「三枚舌外交」

中東の現在を規定している歴史的原因は、有名な英国の「三枚舌外交」に示される帝国主義の植民地支配にある。これは過去のものとは言えない。西欧による身勝手な領土分割、分断支配、政權転覆、宗派の利用、ダブルスタンダード、騙し討ち。欧米諸国は、こうした狡猾で非道な方法によって彼らの利権の最大化を謀ってきた。エドワード・サイードの批判した、あの偏見に基づく「オリエンタリズム」の支配様式である。西洋側の自己中心的な思考様式

であるオリエンタリズムは、常に東洋に後進性や受動性、神秘性といった非ヨーロッパイメージを押し付け、西洋優位の側から中東地域をとらえる。この支配様式は、今日もくり返されている。

2016年「サイクス・ピコ密約」の100年前を思い返してみるべきではないだろうか。

第一次大戦時の英国の「三枚舌外交」の中心は覇権であり、資源収奪のための植民地獲得にあった。

19世紀後半に石油がアメリカやロシアで産業に活かされ、灯火や暖房として使われ始めて以降、技術革新が進み、20世紀初めには船舶のジーゼルエンジンとして使われるようになると、海軍中心に石油の戦略的意義が急速に認識された。イギリス海軍の石炭から石油への燃料転換は、第一次大戦の直前である。石油は石炭と同じ体積で2倍の距離を航行することができる。加えて、ボイラーへの投入という石炭でかかる人力を不要とし、海上の煤煙で敵に発見される石炭よりリスクも少ないという利点がある。こうして石油は戦争の勝敗を決する戦略物質として、油田探査が広がった。当時、イラン南部を支配していた英国は、油田が発見されると、1914年には英海軍がアングロペルシャ石油（後の「ブリティッシュペトロリアム」BP）の株の50%を取得したという。

当時海軍大臣だったチャーチルは、「海軍が考える石油政策は、海軍が直接に石油の所有者となり、生産者になることである。石油の供給先は、できる限りイギリスの支配下、または勢力下にあつて、イギリス海軍が容易に確実に保護できる地域に鉅区を持つものでなければならない」と、議会演説している。帝国主義の植民地収奪の中心は、この意図通りに石油の宝庫中東であった。このチャーチル演説の1914年は、第一次大戦勃発の年である。石油資源の確保、さらには地政学的な覇権争奪が始まると、英国はオスマン・トルコ支配地域を自らのものとするために「三枚舌外交」を展開していく。

その第一の舌で騙したのは、1915年から1916年。今から100年前に出された「マクマホン書簡」である。英国はこれまで400年、オスマン帝国と友好を保ち、カリフ制も支持してきた。しかし、ドイツ側についたオスマン帝国支配地域を自らのものとするために、まず宗教を利用し、アラブ人を利用した。1914年には「カリフ制を保持できるムスリム共同体はアラブ共同体のみである」と言い出した。そして、1915年に入ると、当時マッ

カの太守であり預言者ムハンマドの家系の末裔といわれるシャリーフ・フセインに狙いを定めた。英支配下のエジプトの駐カイロ高等弁務官であったマクマホンが、フセインに書簡をまず送った。いわく「アラブ人こそマッカ、メディナの聖地に、カリフ制を打ち立てる時だ。アラブ人こそその資格があり、英国は武力でカリフ制を守る準備がある。オスマン帝国を倒すためにアラブ人が乱を起せば、英国はアラブの独立国家を保障する」と唆した。カリフ制を遊び、アラブ人とトルコ人の対立を煽り、イスラームの分裂を謀ったのである。太守フセインはマクマホンと書簡を往復させて、アラブの反乱計画に同意した。フセインは自らをアラビア半島・マッカ・メディナのあるヒジャーズの王に、長男にはそれを継がせ、次男のアブドラーヤや三男のフェイサルが大シリアの王になることを描いた。そして、カイロから派遣された陸軍諜報将校のロレンス（西側で美化されたアラビアのロレンス）を顧問に迎えた。フセインはロレンスを「息子」と呼んで信頼し、フェイサル司令官のもとアラブ軍を組織し、1916年6月5日、反オスマン・トルコの闘いが開始されていたという。

このマクマホン書簡の一方で、ロレンスは本国に向けて次のようなことを記していたことが、今では明らかにされている。以下は「イスラーム国」（アブドルバーリ・アトワーン著）からの引用である。

「1916年、英諜報機関による覚書が作成され、ロレンスがその執筆者であった。彼はこの中で、アラブ革命の宣揚の裏にある計略について言及、『アラブ社会はトルコ人社会のように安定しておらず、モザイク化した政体を持っている。分裂を好み、嫉妬にとらわれ、首長国が乱立しており、団結することができない。共同で我々に対して、反乱を起こすこともできないだろう』とした。ロレンスは別の文書で、次のようにも語っている。『戦争が起きたため「イスラームの分割」という緊急の課題が付け加えられた。太守フセインは、この分割のために選ばれたのである。分割し統治せよというわけである』と。「2年続いた『大アラブ革命』は、オスマン帝国の崩壊をもたらした。英軍とその同盟者、非正規アラブ軍は、第一次大戦中オスマン軍と闘っていた。（中略）オスマン帝国側が、ロレンスの首に1、5万ポンドの賞金をかけたが、それに応えたアラブ人は誰もいなかった。しかし、不幸なことにアラブ人のこうした高貴なマナーが報いられることはなかった」

とアトワーンは記している。そして、アラブを独立させるという約束は後に棄てられていくのである。

第二の狡猾な舌は「サイクス・ピコ秘密協定」である。「フセイン・マクマホン書簡」を裏切る密約が1916年5月になされていた。ちょうどフェイサルのアラブ軍がすべての準備を終えて、6月に決起する直前にあたる。この「サイクス・ピコ密約」はオスマン帝国敗北後の領土分割に関する英・仏の密約である。今もロンドンの英公文書館にある当時の原本の地図には、A地域（現在のトルコ南からシリア西部レバノンにかけて）の仏直轄領、B地域（イラク中南部に至る地域）英国直轄領の定規で分けられた直線によって鮮やかに色分けされているという。この地図はロシアも加えて、3国の領土分配や勢力圏の密約を示し、英下院議員サイクスと仏外交官ピコの署名がある。そして、原本の協定の末尾に一文が付記されているという。「協定の存在に関し、日本政府に通知されるべきと英国政府は思慮する」と。日英同盟下にあった日本も当事者の端くれであった。

しかし、第一次大戦中の1917年、ロシア革命が起こる。その結果ソヴィエト政府によって、この密約は始めて世界に暴露され、破棄が宣言されるのである。英仏は後に復活させるのだが、この「サイクス・ピコ密約」で、英、仏が狙っていたのは、チグリス河の流域の豊富な石油埋蔵地域の利権である。この頃には、すでに英国はイラン南部からペルシャ湾岸地域、インドまで植民地下に置き、独占的支配を確保している。

英国の三枚目の舌は、現在に至るパレスチナの悲劇の元になる「バルフォア宣言」である。この1917年の11月に発された「バルフォア宣言」には、前提がある。当時、すでにユダヤ人シオニストは1897年「第一回世界シオニスト会議」をスイスで開き、パレスチナに「ユダヤ国家」を建設することを一方的に決定していた。

欧州のキリスト教社会で迫害されてきたユダヤ教徒の中から、ヨーロッパの国民国家、民族国家が領域国家として形成されていく中で、ユダヤ教徒もまた、宗教を利用してユダヤ民族国家をつくらうという考えが生まれてきた。この考えは当時、多数ではなかったが、バクー油田の利権を持つロスチャイルドなどのユダヤ資本家の帝国主義植民地支配の要求と知識人らによるユダヤ国家建設案が結びついて生まれてくる。1896年、第一回世界シオニスト会議の一年前に書かれたテオドール・ヘルツルの「ユ

ダヤ国家」出版を機に、シオニズム運動が始まる。「シオン」とは旧約聖書におけるエルサレムの呼称の一つであるという。エルサレムのシオンの丘に帰る、つまりパレスチナにユダヤ人の国をつくる運動をシオニズムという。「土地なき民に民なき土地を」をスローガンに、すでにアラブの民の住むパレスチナ侵略を企てるのである。このヘルツルの本には、ユダヤ人の歴史的郷土（パレスチナ）にユダヤ国家をつくることは「アジアに対するヨーロッパの保塁の一部」であり、また、「バーバリズムに対する文明の前哨」の役割を果たしうると記しているという。帝国主義者の東洋蔑視のままである。この第一回の世界シオニスト大会を経て、シオニストは以来帝国主義国家に寄生し、この時期は大英帝国の植民地政策の内外でこの実現のために財力、人脈を駆使して工作してきた。

第一次大戦勃発前から戦時中も英国の閣僚の一人であったシオニスト、ハーバード・サミュエルは、1915年3月には、オスマン帝国崩壊後のパレスチナについて「私案」を提起している。いわく「パレスチナ国家を持ちたいというユダヤ人の夢を満たすために、そこに英国の保護国を作れば、スエズ運河東部の固めとして英帝国の利益と合致する」と。このサミュエルこそ、後に英植民地支配者として、初代パレスチナ高等弁務官として登場する人物である。この案は、当時の内閣では採用されなかったが、その次に、シオニズム、ユダヤ資本家に親和的だったと言われるロイド・ジョージが細關した。この閣僚の外相がバルフォアである。ロシア革命の騒乱の時代であり、中東、スエズ運河東部の固めや英植民地支配の今後の保塁として、あるいはユダヤ資本家からの莫大な戦費調達の便宜上の理由か、ロイド・ジョージ内閣はシオニストを味方とすることにした

ようだ。

こうして、繰り返しのシオニスト工作が奏功して、バルフォア外相が当時イギリス・シオニスト協会の会長、ウォルター・ロスチャイルドに宛てた書簡が「バルフォア宣言」である。1917年11月2日のことであった。いわく「英政府はパレスチナにユダヤ人のための民族郷土を設立することに賛成し、この目的の達成を容易にするための最善の努力を払う。ただし、パレスチナに居住する非ユダヤ人社会の市民的、宗教的権利及び他の諸国におけるユダヤ人の享受する権利と政治的地位を損なうようなことはしない旨、明確に了解されること」という短い書簡である。この「お墨付き」を得て、後にシオニストによるパレスチナへの移民と建国が正当化されていくことになる。

第一の舌で約束していたマクマホン書簡の「アラブの独立国家」は当然パレスチナの地も含んでいる。さらにサイクス・ピコ密約ではパレスチナは、イギリス植民地に割譲されている。その上に、パレスチナに「バルフォア宣言」ではユダヤシオニストにユダヤ民族郷土を許すといった三枚舌の外交によって大英帝国の利を貫こうとしていた。宗教の利用、当事者との約束を無視した「密約」「領土分割」英国の狡猾なこのやり口は、後の中東に混迷をもたらす。しかし、中東支配に限らない。エジプトに対する英の占領支配、ペルシャ・カジャール朝下の議会無視の利権の強奪、インド支配、中国アヘン戦争に示されるように、大英帝国は支配のために弾圧や諜報策動や犯罪をくり返した。これは米欧の帝国主義の植民地争奪以降もくり返される手口であり、また、日本帝国主義が侵略、植民地支配で犯したやり口と共通するところである。

(つづく)

## 後記

今号に乗せました「中東2016年——『サイクス・ピコ密約』から百年(上)」の全文は、最新(2月中旬発売予定)の「情況」誌に掲載されます。「オリーブの樹」誌上では、(下)を134号に載せます。

世界各地で、激動の年が明けました。IS攻撃を口実にしたシリアへの集団的あるいは競争的空爆の強化、避難民のあふれるヨーロッパとそこでのいざこざ、ISの過激な行動はインドネシアにまで拡大、サウジアラビアの軍事的加担、北朝鮮の水爆実験やミサイル実験、安倍政権の平和という言葉を散りばめた軍事化路線、そのどれもが、今現象している様々な世界の問題の解決に向かうことはできないでしょう。力で押さえつけることは、力での反発を招き、泥沼状態を悪化させるだけです。平和な世界をめざして、共に進む道を追求めたいです。(Y)

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階  
救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」  
郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

## 「正誤」表

### 第 133 号

- ①8P(1/1)右下から2行目 ヤマトナンチュ→ヤマトンチュ
- ②9P(1/1)左下から8行目 王政国家→王制国家
- ③10P(1/20)左下から1行目 鶴見俊介→鶴見俊輔
- ④11P(1/20)左4行目 味のある分→味のある文
- ⑤12P(1/31)右9行目 「政治の場で→政治の場」で
- ⑥13P(読んだ本)左上から10行目 悪化してきた→悪化させてきた
- ⑦13P左下から10行目 支給再会→支給再開
- ⑧15P左下から19行、18行目 「分かれ」→「わかれ」(2カ所)
- ⑨15P左下から3行目 作歌→作家
- ⑩15P右上から2行目 作歌→作家
- ⑪16P左下から6行～5行目 「11・3 パリ事件」→「11・13 パリ事件」
- ⑫20P左下から16行目 ハーバード・サミュエル→ハーバート・サミュエル
- ⑬20P右下から15行目 パレスチナはイギリス  
→パレスチナは、当初国際管理とされた後に、イギリスと(挿入)